

直川八幡山古墳群遺跡分布調査

1982年3月

和歌山県教育委員会
社団法人和歌山県文化財研究会

まえがき

紀ノ川中・下流域一帯の古墳文化は、全国的にみてもきわだって特徴的な内容を有することで、はやくから注目されていた。

宅地造成予定地である直川八幡山一帯も、すでに古墳群の存在が確認されており、その内容を明らかにするための調査が必要であった。今回、われわれが実施した分布調査は、造成予定地内の周知の遺跡について、その性格、内容、位置を正確に記録し、またその他の未発見遺跡の探索を、その目的とした。

分布調査は、遺跡調査の基礎的作業だが、文化財保護の見地からすれば最も基本的かつ重要な前提作業であり、すべてはそこから出発するといつて差し支えない。したがって、われわれの調査も、種々の方法を用いて慎重に進めなくてはならなかった。

幸い、調査の実施に当っては調査委員の諸先生による適切な指導と、関係諸機関、地元住民の方々の協力を得て、遅滞なく終了することができた。また、東急不動産株式会社は、文化財保護に十分な理解を示し、われわれの調査に積極的協力を惜しまなかった。

開発行為と文化財保護の問題は、これからも継続して追究すべき課題であるが、今回の調査は、その意味でも今後の在り方を探る貴重な経験であった。

田 辺 昭 三

例 言

1. 本書は、社団法人和歌山県文化財研究会が東急不動産株式会社から委託を受けて実施した昭和56年度直川八幡山古墳群遺跡分布調査の概要報告である。
2. 本分布調査に要した経費はすべて東急不動産株式会社が負担した。
3. 本分布調査は、和歌山県教育委員会の指導のもとに社団法人和歌山県文化財研究会が実施した。
4. 本書は、小森、原山が執筆、上村が製図し、田辺が編集した。
5. 本調査の組織は次のとおりである。

社団法人和歌山県文化財研究会直川八幡山古墳群遺跡分布調査委員会

調査委員長 田辺 昭三 京都市埋蔵文化財研究所調査部長

調査委員 鷗磨 正信 和歌山県文化財保護審議会委員

〃 巽 三郎 〃

〃 都出比呂志 〃

〃 藤沢 一夫 〃

〃 畑村 半亮 県文化財課長

調査員 小森 俊寛

〃 原山 充志

〃 荒川 陽生

〃 長戸 満男

〃 上村 憲章

事務局

局長 海野 正幸

次長 梅村 善行 (県文化財課課長補佐)

幹事 桃野 真晃 (〃 第二係長)

技術員 辻林 浩 (〃 技 師)

書記 宮本登志夫 (〃 主 事)

本文目次

調査範囲	P. 1
調査の方法	P. 1
分布調査の成果	P. 2
付編 和歌山市府中今滝の石造物	P.18

図版目次

図版 1	調査地遠景 A 7 (直川八幡山7号墳)
図版 2	A 1～4 (直川八幡山1～4号墳) A 3 (直川八幡山3号墳)
図版 3	A 5 (直川八幡山5号墳) A 8 (新発見の古墳)
図版 4	B 3 (マウンド) B 4 (マウンド)
図版 5	B 5 (マウンド) 遠景 B 5 (マウンド)
図版 6	E 1 (炭窯) E 2 (炭窯) 近景 E 2 (炭窯) E 3 (炭窯) E 4 (炭窯)
図版 7	D 1 (遺物包含層) 断面 G 3 (東側石) G 3 (西側石) G 3 (石群) 遠景

調査範囲

大阪府と和歌山県を画す和泉山脈は、日本最大の活断層である中央構造線に並走している。東西に走る山脈の南側平野部には紀ノ川がゆるやかに西流する。和泉山脈は中生代・白亜紀の和泉層群（砂岩を主とし、頁岩・礫岩で構成されている）より成っている。紀ノ川以南で古生代の三波川系の結晶片岩より成る岩橋、花山などをはじめとする低い山地や丘陵とは基盤の岩質をまったく異にした山地である。

今回の分布調査対象地域は、和歌山県直川の北部、和泉山地中の宅地造成予定地域内全体である。南は山際に宅地造成されてすでに住宅地となっている直川ニュータウンの北限、西は千手川が形成した「畑」の谷筋、北はほぼ東西に走る「墓の谷」（調査対象地域の西北で南において「畑」の谷筋に合流する）に、東は「湯谷池」西側から、「湯谷」を形成する東側の尾根筋沿いによって区画された約150万平方メートルである。平野部はまったく含まれていない。

和泉山脈の平野部に沿った比較的低い尾根線上及び平野部にくだる支尾根上には著名な大谷古墳をはじめ、大谷古墳群、鳴滝古墳群、北山古墳群、八王寺山古墳群などを主に古墳時代後期の古墳群が点々と形成されている。今回の調査対象地域南部の平野部に最も近い120m前後の低い尾根線上にも直川八幡山古墳群が、県教育委員会の公布調査によって既に確認されている。

調査の方法

調査対象地域南部の尾根線上は、古墳を対象とした分布調査が実施されており、上記したように直川八幡山古墳群を確認するという大きな成果を上げている。しかし、古墳が存在する尾根線以北の山岳地帯は山谷が険しく、又、以前より知られている著名な遺跡も存在しないため、考古学的対象地として扱われることがほとんどないまま現在に至っている。確かに分布調査を実施するといっても、険しい山谷に対して、どのような遺跡を想定し、どんな方法を用いて調査を行ったらいいのか、未知数の解決しなければならない問題点も多い。しかし、全国各地で、古墳、須恵器の窯址などを主に対象とした分布調査が実施され、その結果、目的的古墳や窯址の発見だけにとどまらず、集落址、祭祀遺跡を発見するなど大きな成果を上げている。神奈川県港北ニュータウン造成地では、丘陵、平地を問わず、すべて人間の行動範囲を対象地域と認識して分布調査を実施し、既発見の遺跡の数倍の新たな遺跡を発見した成果が報告されている。又、近年の考古学的調査成果を見ると、集落の存在がほとんど考えられなかった山上に、弥生時代の高地性集落が、畿内や瀬

戸内地域を中心に多数発見され調査されている。

我々も、単なる地形上の先入観を捨て、分布調査の最も基本的な方法である考古学的視点に基づいた地表面上の観察とボーリング・ステッキによる土層観察を組みあわせて、尾根線上、谷底部、傾斜地など山地のすべての地表面を調査対象として、全体の分布調査を進めることにした。

分布調査にあたって主に使用した地図は、調査地全体を含む縮尺1/2500のものと、現場で測量点のわかる縮尺1/500の地図である。

調査地域が非常に広いため、予備踏査の結果に基づき、地形、想定しうる各種の遺跡の立地条件等を考慮し、全体を5地区に分けて各地区の調査目的を明確にして分布調査を実施した。

分布調査の成果

直川八幡山古墳群がすでに発見されている調査地域南部の尾根上で新たに円墳(A-8)を発見したのをはじめ、遺跡が存在する可能性の非常に少ない北部の海拔200~300mの比較的高い尾根線上でも土師器片などの遺物を採取した。また、近世以降のものではあろうが、炭窯も発見し確認している。以下、分布調査で発見した各種の遺跡を下記の様に分類し、報告する。

- A 古墳
- B マウンド
- C 遺物採取地点
- D 遺物包含層
- E 炭窯
- F 石垣
- G その他の遺跡

A-1 (直川八幡山古墳群1号墳)

四ツ池の東側を北東から南西方向に延びる尾根の段状を形成する標高105mの位置に立地する古墳である。直径約15mの円形のマウンドを持ち、高さは、傾斜面でのマウンド下端から2.5~3.0mであるが、尾根線の道筋からは0.3~0.5mの高さを残す程度である。斜面に面した南東方向は、半ば以上が崖崩れにより「U字状」に壊れる。又、残存するマウンドの上部も尾根筋の傾斜にそってゆるく南西方向に下がっており、マウンド上部は流出等により欠損したものと判断される。崖面で観察できるマウンドの状況は、上面付近に薄

調査日程表

年月日	予備調査	1区	2区	3区	4区	5区	補足・整理
1982							
2・1	(予備調査開始)						
2	A 1~7						
3	雨						
4							
5							
6							
7	地区割り	(1区調査開始)					
8		D 1					
9		A 5~8					
10		C 1, G 1-2, F 1					
11		A 1~4					
12							
13							
14							
15		C 4					
16		G 3-4					
17	雨						
18							
19			(2区調査開始)				
20		B 1-2					
21			休				
22			B 3				
23			B 4, G 5-6	(3区・4区調査開始)			
24							
25			F 2				
26							
27							
28							
3・1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							
16							
17							
18							
19							
20							
21							
22							
23							
24							
25							
26							
27							
28							
29							
30							
31							A 1~8 (記録)

A 1~7: 直川八幡山古墳群 1~7号墳, A 8: 新発見の古墳, B 1~5: マウンド, C 1~7: 遺物採集地,
D 1: 遺物包含層, E 1~5: 炭層, F 1~8: 石垣, G 1~19: その他の遺跡

く淡黄色の泥砂土が被り、以下は風化の進んだ軟質の砂岩が礫状を呈する岩盤である。崩壊部断面では、石室等主体部を形成するものは確認できない。

A-2 (直川八幡山古墳群2号墳)

四ツ池の東側を北東から南西方向に延びる尾根が、比較的広い平坦部を形成する標高約123mの台状の位置に立地する古墳である。墳形、マウンド共に不明瞭であり、円墳か前方後円墳かは断定が困難である。ただ、くびれ部と考えられる凹部が、左側は明瞭に、右側はわずかに認められる。このことから、前方後円墳の可能性が強いと考えられる。前方後円墳であれば、後円が径約8.5mで、全長約20mを測る。円墳であるとすれば、径20~30mで、一部崖崩れのため欠失しているものと考えられる。マウンドは淡黄褐色の良質な泥砂土で形成される。前方部と考えられる部分は、後円部から南西方向にゆるく傾斜しており、後円とも明瞭ではない。

なおこの古墳との関連等は明らかではないが、前方部にあたるマウンドの南方に径約6m、高さ約0.4m程度の凸部が認められる。

A-3 (直川八幡山古墳群3号墳)

四ツ池の東側を北東から南西方向に延びる尾根上に立地する古墳である。A-2からA-4が立地する尾根頂部の中間に位置する。標高は約120mである。墳形は円形で径約14m、高さ約2.5mを測るが裾部の広がりやや不明瞭であり、若干大きくなる可能性もある。マウンドの基盤は、風化の進んだ軟質の砂岩の岩盤で、東側裾部付近では岩盤が露頭するが、マウンド頂部付近では淡黄褐色泥砂土が認められる。マウンド南東斜面から南東方向に延びる尾根筋の斜面は、南東方向に三角形の張り出しがあり、その斜面に石群を発見している。石群は20~30cm大の砂岩からなり、土留のために張り付けられた様な状態を呈している。古墳のマウンドとは直接関連しないものと判断したが、関連するものであれば、前方後円墳になる可能性がある。

A-4 (直川八幡山古墳群4号墳)

四ツ池の東側を北東から南西に延びる尾根筋の北部で、標高約144mの頂部に位置する古墳である。尾根筋は当地点より北東約60mで東側に曲がりA-8及びA-7(7号墳)に続いている。マウンドの形状は、径約22.5mの円形と考えられるが、南東の斜面は崩れており、全体の形は確認できない。マウンドは淡黄褐色泥砂土が認められるが、各所に砂岩の岩盤が露頭し、南東の傾斜面中腹から裾部には、落石した砂岩が多量に散布する地点も認められる。

A-5 (直川八幡山古墳群5号墳)

A-7(7号墳)から南に延びる尾根の南端頂部に位置する古墳である。南北約24.8m、東西約22.3mで、高さは約2~3mを測り、四角が丸味を帯びる方形状を呈する。西側斜面には、土留めのための石と考えられる20~30cm大の砂岩が若干残存する。全体に残存状況は良い。マウンドは淡黄褐色泥砂土によって形成されている。

A-6 (直川八幡山古墳群6号墳)

A-7(7号墳)から南に延びる尾根上に立地し、A-5から鞍部を間にはさんだ北側に位置し、比較的平坦に延びる尾根がA-5との間の鞍部に向って一段下がる部分の先端に位置する古墳である。マウンドの形状は不明瞭で、北に延びる尾根筋とは、ほとんど落差が認められない。しかし、南・西の斜面、裾部ともに比較的是っきりしており、全体として円形を呈するものと想定される。現在確認できる頂部の位置、南・西の裾部との関係から見て、径15~16mの円墳と考えられる。頂部から南側裾部との落差は約3.4mを測る。南側斜面、裾部に土留め用のものと考えられる15~20cm大の砂岩が数個認められる。マウンドは基本的に淡黄褐色泥砂土から成る。

A-7 (直川八幡山古墳群7号墳)

直川八幡山古墳群の形成された山塊の中央部で標高約150mの頂部に位置する古墳であり、「妙法塚」と呼ばれている。形状は、雑木、雑草が多く全体の形の確認は困難であるが、既存の記録資料によって全長約40mのマウンドであるとすれば、前方部は平野部に対して裏側に延びる尾根上に位置する事になり、形状と立地の点でやや無理が生じるが、前方部は長さ約21m、巾約15m、後円部は径約20m(強)を測るものであろう。後円部にあたる標高150m以上の部分のみがマウンドである可能性も残る。マウンドの基盤は砂岩の岩盤で、前方部、後円部にあたる墳丘の表面にも各所に砂岩の露頭が認められる。その他は淡黄褐色泥砂土が残存している。マウンドの立地する尾根頂部の南側斜面、及びA-6に延びる支尾根は砂岩の露頭が多く、現在も岩盤の崩れが続いており、傾斜面の中腹から裾部にかけて落石が多く散布している。

A-8 (今回の調査で新たに発見した円墳)

A-7から西に延びる尾根筋の高みが形成する張り出し部の西側先端付近で標高約142mに位置する。南側斜面が明らかに確認でき、土留めに用いられたと考えられる20~50cm大の砂岩が小群を為して残存している。石の残存状況は裾部付近では比較的良好である。マウンドは径約15m、高さ約3mの円形である。東側はA-7に続く尾根筋がほぼ平坦に延

びるが、石群及び、淡黄褐色泥砂土が現在の尾根道下に入り込む状態を呈しており、東側の斜面は埋まって平坦な尾根筋を形成しているものと判断される。マウンドは淡黄褐色泥砂土によって形成されており、小礫の混じる部分もみられる。

B-1 (マウンド、古墳か)

湯谷池西の北側の谷と南側の谷の間の尾根筋の中ほどに位置するマウンドであり、平野部から見てA-7、8の裏側にあたる。径約20m(強)の円形に近い形状である。マウンド部分は淡黄褐色泥砂土が、砂岩の岩盤に被った状態を呈する。付近の状況は、尾根筋から少し下がった部分には風化の激しい砂岩の岩盤が露頭する。斜面中腹から裾部は淡黄褐色泥砂土が厚く堆積している。この淡黄褐色泥砂土は流土の堆積と考えられる。裾部の崖面でも上部に淡黄褐色泥砂土が厚く堆積し、下部に岩盤が確認できる。

B-2 (マウンド、古墳か)

湯谷池西の北側の尾根筋の中ほどに位置し、平野部から見てA-7、8の裏側にあたる。直径約11m、高さが2m弱の円形に近い形状を呈している。マウンドは淡黄褐色泥砂土からなる。周囲の状況はB-1と同様である。

B-3 (マウンド、古墳か)

畑ノ谷に面する中谷池の南側の尾根頂部に位置するマウンドである。此所からは四ツ谷を通して和歌山平野を望む事ができる。直径約20m、高さ約2.5mの円形に近い形状を呈している。マウンドは、淡黄褐色泥砂土で、下部になるにつれて礫が多く、大きくなる。深さ約30cmに灰白色粘質土(砂質)の見られる部分もある。マウンドの南側斜面は、2か所で大きく崩れる。

B-4 (マウンド)

畑ノ谷に面した中谷池南側の尾根筋に位置するマウンドである。長軸約12m、短軸約7mで瓢箪形に近い形状を呈している。長軸の軸線は、ほぼ北東から南西に向く。マウンドは風化した砂岩の岩盤からなり、きわめて軟質である。マウンドの頂部をはじめ、岩盤の露頭していない淡黄褐色泥砂土の部分は、砂岩が土化したものと考えられ、土中に礫が混じる。高さは約1.6mを測る。B-3、4は、平野部から見て、北山古墳群の北側の尾根にあたっている。

B-5 (マウンド)

畑ノ谷に面する中谷池北側の尾根上の南端付近に位置するマウンドである。南北約37.5m、東西約32.8mの方形に近い形状を呈するが、全体の形状は不明瞭で特に東側の形状が

明瞭でない。南側には幅約14m、長さ約13mの方形の張り出しが認められる。高さは1.5～2.0mを測る。マウンドは風化した砂岩の岩盤からなり、部分的に淡黄褐色泥砂土も認められる。

C-1 (遺物採取地)

A-1～8の直川八幡山古墳群の立地する尾根筋に囲まれた谷筋の奥に位置し、A-3、4の東側傾斜面の裾部にあたる。この場所から緑泥片岩を1箇採取する。尾根筋の古墳に用いられていたものが分筋に落ち込んだものであろうと考えられる。

C-2 (遺物採取地)

湯谷池西の北側谷筋の中ほどで、G-3の石(中腹、底部東側)の周辺に位置する場所で緑泥片岩2片を採取する。

C-3 (遺物採取地)

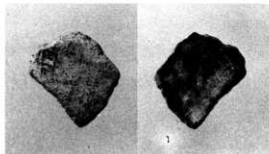
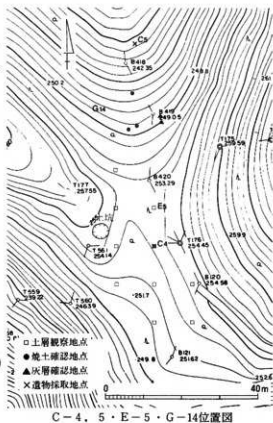
湯谷池西の北側谷筋の奥の斜面中腹の石の周辺で、緑泥片岩1片を採取する。これは、石に被る流土(淡黄褐色泥砂土)より出土する。

C-4 (遺物採取地)

枇杷谷奥の尾根筋鞍部にあたる平坦地(G-14)の中央部に位置する場所で、土師器片3片を採取する。これは、表土下20cmより出土する。出土した土層には小炭片が比較的多く含まれる。

C-5 (遺物採取地)

枇杷谷奥の尾根筋鞍部にあたる平坦地(G-14)の北側に延びる野田ノ谷支谷の谷筋の斜面で、平坦地からやや下がっ



C-5. 採取土師器片

た位置より土師器片1片を採取する。炭焼窯に関連するものと考えられる炭片の混入する流土に被る可能性のある流土中より出土する。土師器片は古墳時代のもので、磨滅しており、流れ堆積の遺物と考えられる。遺物を採取した地点の上部で炭層を、上の平地中央では炭焼窯1基（E-5）を発見している。

C-6（遺物採取地）

中谷奥の尾根筋が東西方向から南に折れ曲がる付近の傾斜面で尾根筋をやや下がった位置から砥石1個を採取する。山林での作業に使用されたものか、明治時代のものである。

C-7（遺物採取地）

猪住谷奥の北側尾根筋で染付碗・鉢等を採取する。明治時代以降の遺物である。

D-1（遺物包含層）

A-5（直川八幡山古墳群5号墳）下の平野部に面する斜面の裾部に位置する。直川ニュータウン東端の造成による南北方向の崖面で確認する。上層は淡茶灰色砂泥層（小礫混入）で、下層は黒灰色粘質土層に分かれる。上層は表土下1.1m、下層は以下に厚さ20cmまで確認する。又、崖面の北端で暗灰色泥砂層を確認する。上層の淡茶灰色砂泥層は少量ながら遺物が含まれている。傾斜面に堆積した流土であろう。下層の黒灰色粘質土層は崖面の断面で見るとかぎりでは遺物は認められなかったが、遺物包含層である可能性は高い。暗灰色泥砂層は黒灰色粘質土層を切る様に堆積しており、断面観察では溝状の遺構に伴う土層の可能性があり、幅40cm程度を確認したにとどまるが、更に北に延びており、遺物の包含量も最も多い。出土遺物は、中世以後のものであり、荘園等との関連が考えられる。西及び南側は、直川ニュータウンの造成に伴って欠失している。採取遺物は写真で掲載している。



D-1. 出土瓦器羽釜片

E-1（炭窯）

中谷奥の東側傾斜面裾部の傾斜のやや緩い部分で、前方は再び急傾斜となり、中谷の小川が北から南に流れている。窯体は斜面の裾部を利用して構築する。斜面裾部を掘り込み、前半分の部分には石を組んで、長方形の窯体と焚口を造り出す。窯壁には粘土を貼り



E-1 (炭窯)(西から)

付ける。煙出しは、左、右及び後の3か所に設けられている。窯体の内径は、幅3.25m、奥行き1.4mで、高さは約1.7mが残存する。焚口は幅約80cm、長さ約1mを測る。天井部は窯壁上端の残存状況から、丸味をもつアーチ形に造られたものと推定される。窯壁、煙出しの内面は黒色で、その外側が暗いセピア色に変色している。窯体内部は炭、焼土が堆積し、窯壁も認められる。天井部も粘土で造られており、窯内に落込んでいる。窯の前方の斜面には灰層が広がる。又、窯体の外周は、斜面の上部にあたる上部及び左右側面の高い部分が溝状に掘られている。なお、窯の上方北側には、斜面に沿ながら石垣を積んで平坦面を造り出し、小屋が建てられている。いわゆる炭焼小屋である。

E-2 (炭窯)

湯谷奥の西側支谷の谷口の西側斜面裾部に位置する。湯谷奥は比較的広い平坦地があり、平坦地の北端で谷筋が三本に分かれる。中央が主谷で、西側、東側に支谷が延びる。主谷奥ではG-10、東側支谷ではF-7を発見している。西側谷筋の北及び西側斜面部には海老峠道が走る。

窯体の構築はE-1と同じで、前半分は石組み、後半分は土掘りである。窯体の形が異なっており、後方の尖った「おむすび」形である。焚口は「おむすび」の下辺にあたる部分に、煙出しは後方の尖った部分に1個造られている。窯体の内径は幅3.9m、奥行き2.7mで、高さは約85cmを確認している。窯体内には、焼土、落込んだ天井部の窯壁、流土等



湯谷遺跡（南から）

窯は全体に崩れが激しく、形状も不明瞭である。E-2と同形の窯であると考えられる。窯体の残存状況は幅約3.6m、奥行き2.3m、高さ0.95mを測る。焚口は底面で幅0.6m、上部で幅1.4m、長さ約0.9mで、部分的に石が認められる。煙出しは径約20cmで、後部に1個造られている。焚口の前方には灰層が厚く広がる。焚口に石が認められる事から、E-2と同様に窯体の前部は石組みであると考えられる。窯体の東1.2mにE-2と同様に幅2.4m、長さ4.6mの不整形な穴が掘られている。

E-4（炭窯）

湯谷奥の西側支谷の東側斜面裾部に位置する窯である。E-2の北約60m、E-3の南東約30mにあたる。

斜面裾部の地形を利用して構築している。窯体は、長方形で幅3.8m、奥行き2.65mを測る。窯体内には埋土が堆積しており埋土上面から最も高い部分で約70cmの高さが確認できる。天井部は側壁付近で厚さ約30cmであるが、ほとんど窯体内に落込んでいる。焚口は幅60cm、長さ1.0mで左側上部は崩れている。煙出しは後方と左右側辺の各々中央付近に各1か所、計3個造られている。後方の煙出しは、径約15cmで窯壁との間は約25cmを測る。E-1～3の煙出しと同様に窯壁下部で窯体につながるものであろう。左右の煙出しは天井部に造られており、窯壁上部が丸味を持って削り込まれている。焚口左側壁から窯体の一部にかけて焼土の混入した土で窯壁が築かれている。造り替え、あるいは補修の痕跡の可能性もある。焚口の前方には厚く灰層が広がる。

E-5 (炭窯)

枇杷谷奥の根椋筋鞍部の平坦地(G-14)中央部北よりに位置する窯である。

窯壁は内側が黒化し、垂直な面を為す。窯壁の東側には、焼土、灰、泥砂土等が混じった埋土が堆積する。観察地点の北東方向に窯体が残存するものと考えられる。

観察地点の南西部分では、炭、灰混じりの泥砂土、北側約25mの地点でも厚さ約20cmの流土下に灰層を確認している。

平坦地内の南西部に径約3.8m、深さ約1.6m以上の大きな穴を確認している。炭焼き作業に必要な水を溜める施設の可能性もあり、炭窯と関連する遺構と考えられる。

窯の築かれた平坦地から南東方向へ延びて海老峠道に通じる道は、比較的幅広く海老峠道と同程度の広さを持っており、炭の搬出路としても機能したものであろう。

F-1 (石垣)

C-1の南で、谷の東側斜面から続く平坦地に位置する石垣である。20~30cm大の砂岩を用いて積まれている。石垣の長さは約30m高さは30cmまで確認しているが更に下に続くと考えられる。この石垣は道沿いに積まれており、畑等の土留めの石垣、もしくは、池の縁に積まれた土留めの石垣であろう。

F-2 (石垣)

中谷池東側の枇杷谷谷口に位置する石垣である。比較的新しい時期の砂防堤と考えられる。中谷池満水時の東端の堤を兼ねたものかとも思われる。石垣の上流の谷底は平坦地になっている。

F-3 (石垣)

中谷池北側の中谷谷口付近で中谷を流れる小流路の西側で確認した石垣である。石垣を境に上と下に平坦地が広がる。石垣下の平坦地は畑地跡、上は現在杉林となっている。中谷を流れる小流路の砂防堤である。

F-4 (石垣)

中谷の中部でF-3の上流約130mに位置する石垣である。F-3と同様、小流路の西側で確認する。20~30cm大の砂岩を用いて2~3段積まれている。F-3と同様の砂防堤である。

F-5 (石垣)

湯谷中部の谷底部に位置する石垣である。小流路の東西で確認する。石垣の西側の斜面は、浅い谷筋を形成している。石垣上には約1.5mの厚さで流土が被る。流土は淡黄褐色

泥砂土で良質な土質である。

F-6 (石垣)

湯谷中部の谷底部に位置し、小流路の東西で確認した石垣である。F-5の上流約40mに位置する。湯谷主谷と湯谷東側斜面の支谷との分岐点にあたる。

西側の石垣は、幅約3.5mが残存し、高さ約3mで砂岩の岩盤を基盤として積み上げられている。石垣は3～4段の石積み毎に控えをとって階段状に積まれており、4つの段に分かれる。各段は60～84cmの高さである。石垣の西端はほぼ90°折れ曲がり、手すり状に前方に張り出している。石垣以西は斜面裾部まで土塊状の斜面が延びている。石垣の東側は崩れており、現在の流路が石垣の基盤となっている岩盤を削って流れている。石垣の下部の2段は厚さ約1.6mの流土によって埋まっている。

東側の石垣は幅約3.1mが残存しており、高さは、高い部分で85cm、低い部分で53cmまで確認しているが、流土が厚く以下は確認できなかった。この石垣は上部が溝状を呈して北に延びており、長さ1.4mまで確認している。溝状の部分は、深さ約30cmで、底部にも石が敷かれている。湯谷東側斜面に形成される支谷からの流路がこの溝状の部分の北側延長部であり、支谷からの流路と主谷と流路の合流地点に築かれた石垣である。

確認した東側石垣東端から西側石垣西端までの長さは8.1～8.2mである。

石垣に階段状の段差を取り、端部の石垣を前方に張り出して手すり状に造られた石垣は、中谷池南端の谷口でも確認している。谷筋の流路を固定するための、水の落し口として造られたものであろう。

F-7 (石垣)

湯谷奥東側支谷の谷口からやや入った地点に確認した石垣である。砂防堤の石垣である。

F-8 (石垣)

湯谷中部の東側支谷上部に位置する石垣である。この支谷はF-6の石垣から延びている谷筋である。谷上部の傾斜は比較的緩やかで幅も広い。

比較的緩やかな谷筋の斜面に、所々石垣が積み、段差と平坦地が造り出されている。植林のための平坦地を造り出すために積まれたものかと思われる。

G-1~19 (その他の遺跡)

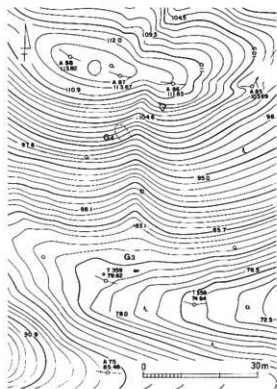
No.	種類	立地	状態	備考
G-1	小盛土	A-1~8の直川八幡山古墳群の立地する尾根筋に北、東、西を囲まれた谷筋の奥、西側斜面の裾部に位置する。	径約4m、高さ約1.5mの小規模なマウンド。	付近で緑泥片岩を採取(C-1)
G-2	土堤	F-1、を発見した谷筋の半ほどの東西の斜面がせり出し谷巾が狭まった部分。	斜面下部より東西方向にのびる。淡黄褐色泥砂土より成る。	谷の最も狭い部分に土堤を築いて池としていたものである。
G-3	置き石	湯谷池から西方に延びる南から2番目の支谷の中ほどに位置する。谷幅は狭いが比較的平坦な面が谷奥に向かってゆるやかに高くなっていく。	石は谷底部から北斜面への傾斜変換点近くに位置している。石は2つで東西方向に並置されている。西側の石は80cm大の大きな石で上面がほぼ平坦で一見、大型の礎石のようにも見える。東側の石は60×80cm、60×40cm、40×20cmの石が十字状に配置されている。東西の石の間隔は約8.5mである。人為的に設置されたものと思われる。	石の北側斜面の尾根線近くに南向きに突出した状態で岩盤の一部が露出している。これは2つの石のほぼ中央の南北ライン上に位置する。全体の位置関係から小規模な祭祀遺跡(磐座等)を構成する可能性も考えられるが、遺物が発見されなかったため断定するに至らなかった。尚、谷底近くの東側の石群及び斜面中腹の大石付近からこの山地では産出しない緑泥片岩の小片を採取している。
G-4	横穴	湯谷池西側の谷の北側斜面上部にあり、G-3と関連する可能性がある斜面上部の岩盤露頭部の西側でB-2のドに位置する。	岩盤をくり抜いた横穴で幅約2m、高さ約3m、奥行き約4mを測る。岩盤は砂岩で表面は非常に滑り。	比較的新しい時期に掘削されたものであろう。G-3との関連は無いものと考えられる。
G-5	石	湯谷池西側の尾根筋の部分的な平坦部に位置する。	石は長さ1.08m、幅0.4の砂岩で岩盤からは独立しており厚さ20cm程度が露出している。	関連する他の遺構は周囲に認められないが、人為的なものと判断している。
G-6	平地	東に湯谷池をのぞみ、西側は東西に延びる分岐尾根筋を間にはさんで中谷池が位置する海老崎道沿いの尾根筋東側に広がる比較的大きな平地である。	東西約16.5m、南北約35mの不整形なプランを持つ。中央部には灰褐色~暗灰褐色泥砂のやや粘質の土が堆積する。	ボーリング・ステッキにより土質の調査を行ったが、圃地が自然堆積により現在の平地地となったものと理解される。
G-7	灰層	枇杷谷中部の流路崖面に確認する。上方の尾根筋、斜面には岩盤が露頭する。	灰層は幅約4m、厚さ約25cmで礫層の上部に堆積する。灰層の上には流土の淡黄褐色泥砂土が厚さ約60m程度かぶる。灰層中より遺物は検出できなかった。	灰層に関連する灰層と考えられるが、窯体は流土が厚く位置は確認できなかった。

No.	種類	立地	状態	備考
G-8	平地	湯谷池西北部に位置する。	湯谷の谷底の川ぞいにくつつかの大小の平地地があり、この地点のものが最も広い。平地地中央付近の地表面で、河原石風の石(15~20cm大)を2個確認する。遺物は発見できなかった。	発見した2個の石は小建物の礎石の可能性も考えられ、遺跡の存在を断定するには至らなかったが、注意を要する地点である。
G-9	灰層	湯谷中部の流跡崖面を確認、F-6の奥約6.2mの地点。	表上下60~80cmは淡黄褐色泥砂の流土が堆積し、以下2mまでの間に淡黄褐色泥砂礫混、黒色細礫、淡橙褐色~褐色の粗砂・砂礫が互層に堆積する。表上下2m以下には灰白色シルト、淡橙褐色泥砂、淡橙茶色礫が認められる。	黒色細礫、淡橙褐色~褐色の粗砂・砂礫としたものは炭灰との関連する可能性がある。黒色細礫としたものは細礫表面に黒色のスス状のものが付着している。
G-10	灰層	湯谷奥の主谷が東西に2分する基部の東側斜面すそ部で認める。		性格は不明である。
G-11	灰層	湯谷谷口の東側斜面中腹の斜面の傾斜が比較的ゆるくなる部分の上端付近に位置する。	暗灰色泥砂中に炭が混入する。	
G-12	うね状遺構 溝状遺構	奥畑に面した西中久保谷西側の尾根筋の頂部付近。比較的平坦な地形である。	うね状遺構は、ほぼ尾根筋に沿っており、溝状遺構は尾根筋をやや下った位置でうね状遺構には沿って掘られている。	炭灰に関連する遺構の可能性が高い。この遺構のやや下の斜面で灰層(G-13)を確認している。
G-13	灰層	奥畑に面した斜面上部、G-12の南西下約18mに位置する。	厚さ約15cmの淡茶灰色泥砂に小片の炭が混入している。上には厚さ約50cm、下層にも流土を確認している。	G-12も含めて炭灰に関連するものと考えている。
G-14	平地地・灰層	枇杷谷奥の尾根筋鞍部平地地から野田ノ谷支谷の上端の斜面にかけての範囲。	平地地では表上下10~15cm以下40cmまでの層中に炭小片の混入する土層を認める。又、平地地北側の斜面上端部でも同様の土層、表上下50~60cmに境上流りの流土等も確認している。	E-5とした炭灰に関連する灰、炭、幾土の散布と考えられる。
G-15	平地地	枇杷谷奥尾根頂部の平地地。G-14はこの平地地の西側斜面下部にあたる。	岩盤の露頭は認められず、比較的幅広い平地地である。北東部は標高288mの尾根の頂部で西西部は1段下って非常にゆるい傾斜を持つ。	
G-16	平地地	湯谷奥の尾根筋鞍部である風吹峠の東西の範囲。風吹峠東側は3区、西側は4区である。G-15の東側斜面下部から鞍部にあたる。	風吹峠東側は全体にやや高みとなっているが、三角形の比較的平坦な面を形成する。G-15の立地する尾根頂部南東斜面にあたるG-16西西部は南東方向に開いた凹部になっている。	風吹峠西側に認められた暗褐色泥砂土は畑等に見られる耕土に類似する。海老峠道は風吹峠西側平地地及び風吹峠の南部を通る。

No	種 類	立 地	状 態	備 考
G-17	野田池跡	野田ノ谷主谷の下部、谷口よりやや奥に入った部分で、谷口から1番目の支谷谷口を含む。	野田ノ谷主谷及び支谷の流路を利用して造られたもので、地形に沿って南東に長い池を形成している。長さ約80m、最大幅は約25mを測る。流路沿い、及び流路に直交する石垣が積まれている。	1952年に枯れる。
G-18	灰 層・炭 混 入 土	野田ノ谷谷口から1番目の支谷下部で野田池跡の奥約50～60mにあたる流路崖面にて確認。	谷口に近い部分で炭混りの暗茶褐色泥砂層を、その奥約7mの地点で灰層を認める。遺物は出土していない。	性格等は不明
G-19	灰 層	野田ノ谷主谷の下部、野田池跡のやや上流にあたる。流路の北側崖面にて確認。	表土下約1mに炭混しりの黒褐色を呈するビート質の土層を発見する。また上流・下流方向には暗灰色のシルト質の土が薄く延びている。	性格等は不明。



G-3 関連の尾根線付近の南へ突出した岩盤（東から）




G-3, 4 位置図

付編

和歌山市府中今滝の石造物

写真を掲載した石造物は、調査地へ通う道際に発見したものである。文献等を調べたが、まだ周知のものとはなっていないようである。記年名の入った石造物から見て江戸時代のまとまった資料と思われるのでここで紹介しておく。

発見した場所は、和歌山市府中今滝村の南のはずれの村道の脇である。土地の人達によると、「付近の土中からまとまって出土したものである。」とのことである。五輪塔、灯籠の竿、石碑などが見られるが、その大半は五輪塔である。破片も多く総数は把握できなかったが、30～40個体はあるものと思われる。記年名の入ったものでは寛永の年号の入った五輪塔が確認したものうちでは最も古いものである。石質はほとんどのものが砂岩である。尚、発見位置は、全体図に五輪塔のマークで示している。



府中今滝朝来の五輪塔群



同、五輪塔



同、五輪塔



調査地遠景（南から）



A-7（直川八幡山7号墳）（西から）



A-1~4 (直川八幡山1~4号墳) (南から)



A-3 (直川八幡山3号墳) (西から)



A-5 (直川八幡山5号墳) (北から)



A-8 (新発見の古墳) (南から)



B-3 (マウンド) (南東から)



B-4 (マウンド) (南東から)



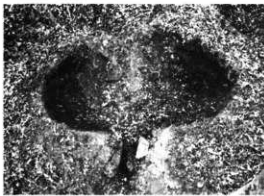
B-5 (マウンド) 遠景 (南から)



B-5 (マウンド) (南から)



E-1 (炭窯) (西から)



E-2 (炭窯) 近景 (東・上方から)



E-3 (炭窯) (北西から)



E-2 (炭窯) (東から)



E-4 (炭窯) (西から)



D-1 (遺物包含層) 断面 (西から)

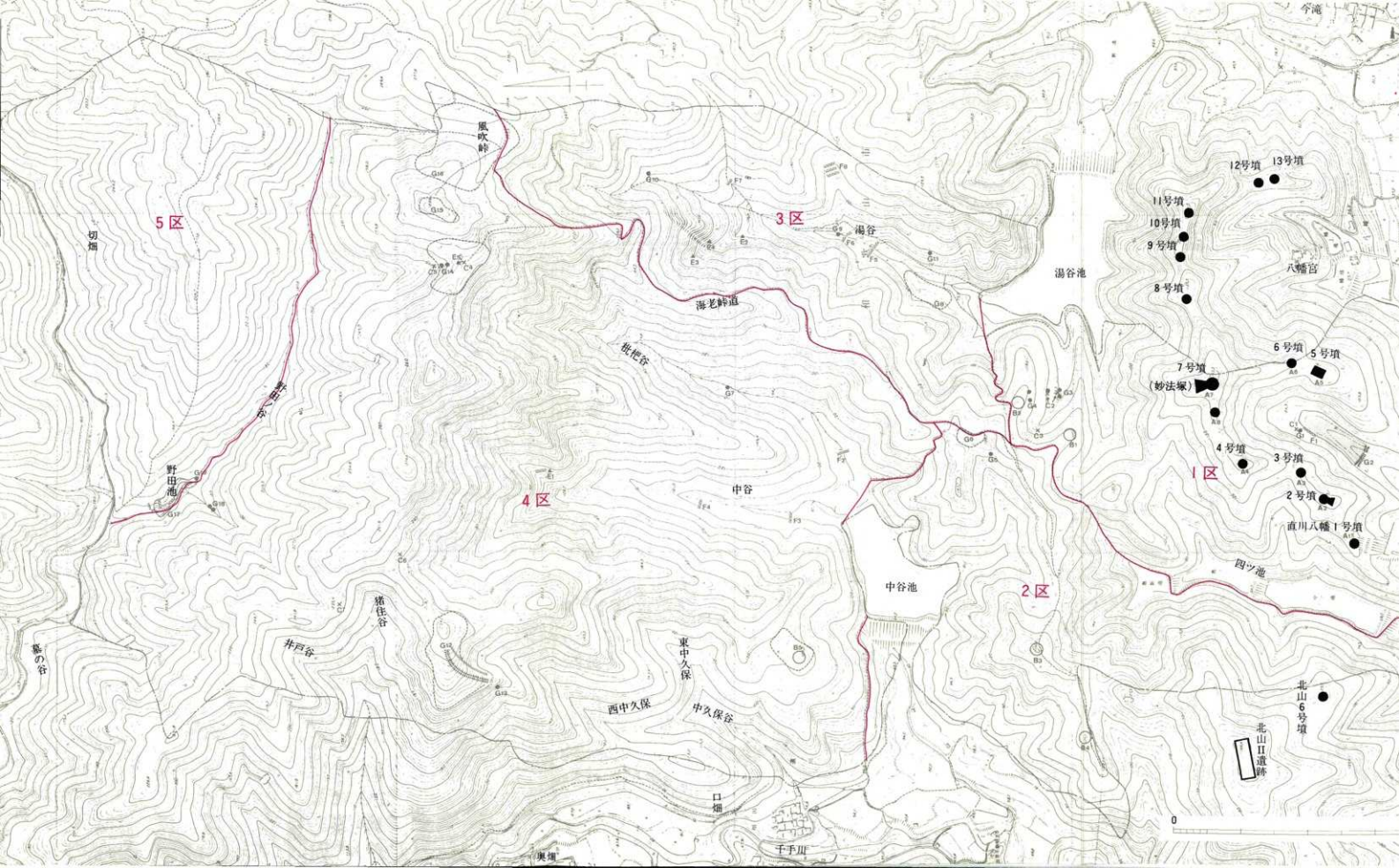


G-3 (東側石) (南から)

G-3 (西側石) (西から)



G-3 (石群) 遠景 (南から)



昭和57年3月31日

直川八幡山古墳群遺跡分布調査

編集 和歌山県教育委員会
社団法人 和歌山県文化財研究会
発行 社団法人 和歌山県文化財研究会
印刷 有限会社 真陽社
製本 京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL075(351)6034